

# 病害虫発生予察情報

## 病害虫発生予察情報(美濃地域) 4月予報

### 【小麦】赤かび病

暖冬により、小麦の出穂時期が早まると予想されます。ほ場での生育状況をよく観察し、開花盛期（出穂期から7～10日後）とその7～10日後の防除時期を逃さないよう注意してください。

### 【果樹】カメムシ類

2月に実施した、チャバネアオカメムシ越冬成虫数調査では、1地点あたりの成虫数が平年と比較し約3倍となりました。今後、4～7月にかけて発生する越冬成虫数は多くなると予測されるため、今後の発生動向に注意してください（裏面参照）。

### ○主な病害虫の発生状況及び今後の予測（4月）

作物	病害虫名 (防除適期)	4月 (予測)	発生状況及び今後の予測						防除上の注意事項
			1半旬	2半旬	3半旬	4半旬	5半旬	6半旬	
水稲	ヒメトビウンカ	少						＜第1世代幼虫発生(小麦)＞	・小麦での防除を行う。
小麦	生育	早	＜出穂＞						(さとのそら)
	赤かび病	やや多	＜感染＞						・赤かび病 高温多雨の気象条件で発生が助長される。防除適期である開花盛期とその7～10日後の防除を徹底する。 ・窒素質肥料の過用を避ける。
	うどんこ病	少	＜発生量増加＞						
防除適期		▲～赤かび病・うどんこ病							
カキ	生育	早並						＜新梢へ移動＞	(富有) 発芽期 3/7 (平年 3/18)
	防除適期		▲～ フジコカイガラムシ						・昨年、多発したほ場では注意する。薬剤防除は、散布ムラがないよう丁寧に行う。
ナシ	生育	早並							(幸水) 発芽期 3/9 (平年 3/15)
	黒星病	並	＜感染＞						・開花期(平年 4/12)に降雨が多いと感染が拡大するため防除を行う。
	赤星病	やや多	＜感染＞						
防除適期		▲～赤星病・黒星病							

注1) ▲：防除適期

### ＜施設野菜＞

作物	病害虫名	4月 (予測)	発生状況及び今後の予測	3月 (発生量)	防除上の注意事項
イチゴ	灰色かび病	やや少	一部のほ場で発病が認められる。花がらや果梗等から発生しやすく、今後、気温の上昇により、施設内が発生適温となるため、増加が予測される。	少	・アザミウマ類 施設内の発生状況に注意し、本虫が増加する前に薬剤防除を行う。 ・ハダニ類 ほ場内をよく観察し、天敵導入後もハダニ類の発生が抑制できない場合には薬剤防除を実施する。薬剤抵抗性がつきやすいため、同一系統薬剤の連用は避ける。
	うどんこ病	少	一部のほ場で発病が認められる。今後、気温の上昇により、施設内が発生適温となるが、発生ほ場では急激な増加はないと予測される。	少	
	ハダニ類	並	一部のほ場で発生が認められる。今後、気温の上昇により、発生ほ場では増加が予測される。	やや少	
	アザミウマ類	やや多	調査ほ場で発生が認められる。今後、気温の上昇により、増加が予測される。	並	
	コナジラミ類	少	調査ほ場では発生は認められない。今後、気温の上昇により、発生が予測される。	少	
トマト	灰色かび病	やや少	調査ほ場では発病は認められない。今後、気温の上昇により、施設内が発生適温となるため、発生が予測される。	少	・コナジラミ類 施設内の発生状況に注意し、本虫が増加する前に薬剤防除を行う。
	コナジラミ類	少	調査ほ場で発生が認められる。今後、気温上昇するが、急激な増加は無いと予測される。	少	
キュウリ	褐斑病	少	調査ほ場では発病は認められない。耐病性品種では今後も発生は少ないと予測されるが、一部の罹病性品種では発生すると予測される。	少	・べと病 曇雨天が続くと発生量が増加するため、薬剤防除を行う。 ・アザミウマ類(ミナミキイロ) MYSV(メロン黄化えそウイルス)を媒介するため、低密度でも薬剤防除を行う。
	うどんこ病	少	調査ほ場では発病は認められない。今後、気温の上昇により、施設内が発生適温となるが、急激な増加は無いと予測される。	少	
	べと病	少	調査ほ場では発病は認められない。今後、降水量は平年並～多いと予想されているが、急激な発生は無いと予測される。	少	
	アザミウマ類	やや少	調査ほ場では発生は認められない。今後、気温の上昇により発生と増加が予測される。	少	
	コナジラミ類	少	調査ほ場では発生は認められない。今後、気温上昇するが、急激な増加は無いと予測される。	少	

注2) 美濃地域は岐阜、西濃、中濃および東濃地域

注3) 調査品種：イチゴ(濃姫・美濃娘)、トマト(CF桃太郎J：葉かび病耐病性)、キュウリ(極光：褐斑病耐病性)

## 数値データ

(調査：岐阜・西濃地域3月)

イチゴ		R1	平年
灰色かび病	(発病果率)	0	(0.2)
うどんこ病	(発病株率)	0	(0.1)
ハダニ類	(寄生株率)	0	(12.6)
アザミウマ類	(寄生花率)	11.0	(10.0)
コナジラミ類	(寄生株率)	0	(1.3)
<b>トマト</b>			
灰色かび病	(発病果率)	0	(0.3)
灰色かび病	(発病株率)	0	(2.5)
コナジラミ類	(誘殺頭数)	0.34	(1.7)
<b>キュウリ</b>			
褐斑病	(発病葉率)	0	(0.1)
うどんこ病	(発病葉率)	0	(1.4)
べと病	(発病葉率)	0	(0.0)
アザミウマ類	(寄生頭数/葉)	0	(0.0)
コナジラミ類	(寄生頭数/葉)	0	(0.0)

注1) ( ) 内数値は平年値、単位は株率・花率・果率・葉率は%、頭数は頭

注2) イチゴは3ほ場、トマトは3ほ場、キュウリは2ほ場の調査

注3) トマトのコナジラミ類は施設内に設置した黄色粘着板1枚あたりの誘殺数 (調査期間：3/1~3/Ⅲ)

## 野菜類 微小害虫

ヒラズハナアザミウマは、イチゴ果実に傷をつけるため、問題となります。現在、一部のほ場で発生量が多くなっています。現在、寄生花率が低くても今後は急激に増加するため、注意が必要です。

ミナミキイロアザミウマは、キュウリ黄化えそ病ウイルスを媒介し、低密度でも大きな被害を与えます。

タバココナジラミは、トマト黄化葉巻ウイルスを媒介します。一部ほ場においてトマト黄化葉巻病の発病が認められ、今後、タバココナジラミの活動とともにトマト黄化葉巻病の増加が懸念されます。

今後は気温の上昇とともに、これら微小害虫の増加が予測されるため、施設内をよく観察し、防除をしてください。



ヒラズハナアザミウマ



タバココナジラミ



ミナミキイロアザミウマ

## 果樹 カメムシ類

チャバネアオカメムシ越冬量調査結果 (頭)

調査場所	調査年度		平年	
	R1	H25 (H26多発年)		
岐阜市	東秋沢	6	10	2.3
	彦坂川南	1	5	1.5
海津市	南濃町奥条	6	6	1.4
大野町	牛洞	1	2	0.3
本巣市	法林寺	2	6	1.4
美濃市	曾代	5	1	2.3
美濃加茂市	山之上西洞	7	4	1.5
	山之上中之番	8	2	0.9
中津川市	落合	0	1	0.3
	阿木	0	1	0.8
恵那市	武並	3	—	—
平均		3.5	3.8	1.3

注1) 令和2年2月落葉採取

注2) 調査地点あたり落葉を50L採取し、ハンドソーティングにより調査

本年1~2月にかけて、県下11地点で実施したチャバネアオカメムシ越冬成虫調査では、9地点で越冬成虫を確認しました。また、1地点あたりの越冬成虫数は3.5頭と平年1.3頭の約3倍確認され、本年度は、越冬地点数、越冬成虫数ともに多い結果となりました(左表参照)。

越冬成虫数が多い年度の翌年度は、4月から7月にかけて発生する越冬成虫数が増える傾向があります。本年度と同様に、越冬成虫数が多く確認された平成25年度の翌年度(平成26年度)では、4月から7月にかけて、越冬成虫の発生が多く、5月と7月に注意報を発表し注意喚起を行いました。

なお、本年度の調査では、例年確認されないツヤアオカメムシが複数地点で認められました。本虫は、昨年の秋に多発し、果樹に吸汁被害を発生させました。暖冬の影響により、例年より多くの成虫が越冬したと考えられるため、今後の発生状況には十分注意する必要があります。

防除所では、予察灯・フェロモントラップの誘殺数(4月~)、サクラ果実吸汁率(5月)の調査を実施し、情報を提供いたしますので、参考にしてください。

### ＝施設栽培の病害虫防除について＝

施設栽培では、作型や栽培環境などにより施設ごとに病害虫の発生状況が異なります。施設内をよく観察し、病害虫の発生状況に応じた防除を実施してください。

### 東海地方1カ月予報(名古屋地方気象台 3月26日)

向こう1カ月の気温は平年並から高く、降水量は平年並から多く、日照時間は少ないと予想されます。天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

岐阜県病害虫防除所では、この他に病害虫の詳細な調査データをホームページにて公開しています。

<http://www.pref.gifu.lg.jp/sangyo/nogyo/gifu-clean/24321/>

〒501-1152 岐阜市又丸729-1 TEL (058) 239-3161 FAX (058) 234-0767